

# どうする？ 社会科における言語力とその評価

兵庫教育大学大学院教授 米田 豊  
兵庫教育大学大学院 米田ゼミ院生

## 1 はじめにー「〇〇力」に要注意

「〇〇力」という言葉がよく使われるようになった。新聞などに見られる書籍の広告には、「〇〇する力」「デザイン力」「ダンドリ力」「マネジメント力」などと「〇〇力」を題名とする本が多く見られる。このことは教育の世界でも同様で、「生きる力」「思考力・判断力・表現力」や「習得力」「活用力」「探究力」、本コーナーのテーマの一つである「言語力」などの「〇〇力」が氾濫している。

「〇〇力」には要注意である。「思考力」や「言語力」という「力」そのものが要注意なのではない。「〇〇力」という言葉が無自覚に使われていることに警鐘を鳴らしたいのである。「〇〇力」を定義せず、その場の雰囲気や「わかったような気」になって使っていないだろうか。

本稿では、社会科における「言語力」を事例として取り上げ、具体的な授業モデルの分析をとおして、その評価のあり方について考える。

## 2 「活用」は場面

最近、「活用力」が教育書でよく使われている。「活用力」という「力」は、さもありそうな「力」である。しかし、活用は「力」ではない。「活用」は学習過程の場面である。なぜなら、「力」は測定可能なものでなければならぬからである。例えば、握力はkgで

測定できる。共通の単位によって測定できるからこそ比較することができる。「Aさんは握力が50kg、Bさんは40kgである。したがって、Aさんの方が握力は強い。」というように比較することができる。そして、そのどちらが強いかの判定は誰が行っても変わらない。つまり、「力」は測定できなければならない。

「活用力」はどうだろうか。そもそも、「活用力」なるものはどのように測定するのだろうか。活用の「力」の強弱を誰もが同じように判定できるだろうか。そう考えると「活用力」は存在しない。活用は「力」でなく、「場面」である。何かを活用する「場面」で用いられる「力」が、その活用の「場面」にふさわしい「力」である。

## 3 「〇〇力」と評価

教育の場面では「〇〇力」の「測定」という表現よりも、「評価」という表現のほうがわかりやすい。教育の世界で使われている「力」は「評価」できるものでなければならない。そして、「評価」の基準（規準）は明確でなければならない。「評価」の<sup>も</sup><sub>の</sub><sup>さ</sup><sub>し</sub>があるかどうか、あるならば、どのよう<sup>な</sup><sub>も</sub><sup>の</sup><sub>さ<sub>し</sub>なのかを理解して「〇〇力」を使わなければならない。日頃、自分が使っている「〇〇力」を再点検してみるのはいかがだろうか。その上で、読者のみなさんと「〇〇力」について改めて考えていきたい。</sub>

図Ⅰ 社会科における「言語力」の構造

言語力	言語活動の内容	習得される知識	問い
①読み取り（記述） 資料を読み取ること	グラフや表、新聞記事、写真、地図、文献を正確に読み取った内容を記述する	記述的知識	「資料からあなたは何を読み取れますか」
②解釈 社会事象の意味、意義を解釈すること	資料に示される社会事象の意味・意義を解釈する	分析的知識	「資料からあなたはどのようなことが解釈できますか」
③説明 社会事象間の関係、関連を説明すること	複数の社会事象について、原因と結果の関係を説明する	説明的知識	「なぜ、このようになっているのでしょうか」
④論述（解釈・判断） 自分の意見をまとめて論述すること	社会事象について、根拠をもって自分の考えや意見を論述する		「あなたは（このことについて）どのように考えますか」

#### 4 社会科における「言語力」

平成20年版小・中学校学習指導要領のキーワードの一つは「言語活動の充実」である。各種の研修会などを通して、国語科を中核にして、全教科で「言語活動の充実」が伝達されている。その影響を受け、筆者の勤務する大学のある兵庫県内の多くの学校で、研究テーマに「言語活動の充実」が掲げられるようになってきた。しかし、「活動」が充実しても、子どもは賢くならない。「活動」の内容が評価できなければ、子どもの成長を見取ることにはできないし、子どもの課題への手立ても考えることはできない。評価できる「言語活動」でなければならないのである。

ここで「言語活動」の言葉を使わず、「○○力」の一つとして「言語力」を取り上げ、具体的な授業実践の取り組みを、社会科で考えることにする。読者のみなさんと共通理解しておきたいことは、「言語力」の育成のために社会科授業を行うのではないということである。本来の社会科の授業が実践できれば、

社会科における「言語力」は育成できるという立場に立つ。実は、多くの先生方はすでに「言語力」を育成する授業を行っている。「社会科における『言語力』の構造」を、先生方の社会科の授業に組み込むことで、社会科における「言語力」は育成される。つまり、今までの授業のどの場面でもどのような「言語力」を育成しているかを再確認すればよいのである。

それでは、社会科授業で育成される「言語力」とはどのようなものだろうか。社会科における「言語力」の構造を図Ⅰのように考えている。

知識注入型や講義型の授業を行う先生が50分間話し続ける授業は別にして、例えば、グラフや表を読み取って、子どもがわかったことをノートに書くという授業はすでになされているだろう。この読み取ったことを記述するという言語活動によって、社会科の基盤となる「記述」というレベルの「言語力」が育成される。

当然、「記述」より社会事象の意味・意義を解釈する「解釈」、「解釈」より社会事象間の関

係・関連を説明する「説明」が高次のレベルの「言語力」である。

授業で「記述」したものを「解釈」し、「解釈」したものを「説明」できる構成になっていれば、社会科における「言語力」は段階的に育成される。

つまり、子どもが「なぜ」という問いに対して解答を説明できる授業、すなわち「なぜ」を解くために、予想や仮説をグラフや地図の資料から情報を読み取ったり、集めた情報を解釈したりして、予想や仮説を検証する探究型の授業を行えば、自ずと「言語力」は育成されることになる。いうまでもなく、社会科

における「言語力」の中核は、「なぜ」の解答となる「説明」である。

最後に、「論述」である。これは社会的な論争問題に対して意志決定したり、価値判断したりする学習場面で育成される「言語力」である。すでに習得した知識（とりわけ「説明」により習得した知識）を総動員して育成される「言語力」である。学習指導要領のいうところの「社会参画」にあたる考えるとわかりやすい。

それでは、筆者の院生が作成した授業モデルを分析しながら、社会科における「言語力」の育成について考えることにしよう。

## 5 モデル指導案—中部地方（「産業を中核とした考察」）『社会科 中学生の地理』 p.206～219

### （1）単元構造図（本誌p.30～31参照）

それぞれの時間で習得させたい知識は、次のとおりである。

第一時 東海は臨海部にあり、温暖な気候である。中央高地には盆地がみられる。降水量が少なく、長野県には諏訪湖がある。北陸は平野が広がり、冬の積雪量が多い。

第二時 愛知県では、織物機械の技術と鉄鋼業や石油化学工業が結びついて、輸送機械工業が発達している。

第三時 愛知県や静岡県では、交通の便のよさや温暖な気候を利用した野菜や果樹、花の栽培がさかんである。

第四時 水はけのよい長野県では果樹栽培がさかんである。また、豊富な水を利用した電気・精密機械工業も発達している。

第五時 平野が広がり、雪どけ水が利用できる新潟県では稲作がさかんで、地場産業も発達している。

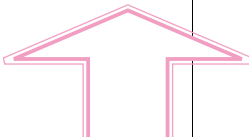
### （2）本時指導過程


#### ①目標

- ・資料1「新潟県、長野県、静岡県の精密機械・金属の出荷額、畑の面積」からA、B、Cに関する情報を読み取ることができる。【評価場面1：技能】
- ・課題（「資料1のA、B、Cが新潟県、長野県、静岡県のどれにあてはまるか考えてみよう。」）について本時までで学習したことをもとに予想することができる。【評価場面2：思考・判断・表現】
- ・予想を検証するための資料を本時までで学習したことをもとに選択・決定を行うことができる。【評価場面3：思考・判断・表現】
- ・その土地の自然の条件や社会の条件を生かして各地の産業は発達していることが理解できる。【評価場面4：知識・理解】

②展開

	学習活動	○おもな発問 ◇おもなよびかけ	予想される 子どもの反応	指導上の留意	資料（※） 評価（☆）																
課題の把握	<p>資料1は新潟県、長野県、静岡県の「精密機械の出荷額」、「金属の出荷額」、「畑の面積」をまとめたものです。資料1のA、B、Cが新潟県、長野県、静岡県のどれにあてはまるか考えてみよう。</p> <p>※資料1</p> <p style="text-align: right;"><small>出典：『地理統計 2013年版』ほか</small></p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th></th> <th>精密機械の出荷額（億円） （2007年）</th> <th>金属の出荷額（億円） （2010年）</th> <th>畑の面積（百ha） （2011年）</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>A</td> <td>2970</td> <td>2601</td> <td>557</td> </tr> <tr> <td>B</td> <td>1618</td> <td>4117</td> <td>200</td> </tr> <tr> <td>C</td> <td>3224</td> <td>5062</td> <td>468</td> </tr> </tbody> </table>				精密機械の出荷額（億円） （2007年）	金属の出荷額（億円） （2010年）	畑の面積（百ha） （2011年）	A	2970	2601	557	B	1618	4117	200	C	3224	5062	468		<p>※資料1「新潟県、長野県、静岡県の精密機械・金属の出荷額、畑の面積」</p> <p>☆資料1からA、B、Cに関する情報を読み取ることができたか。【評価場面1：技能】</p> <p>※資料2「中部地方の自然」</p>
		精密機械の出荷額（億円） （2007年）	金属の出荷額（億円） （2010年）	畑の面積（百ha） （2011年）																	
A	2970	2601	557																		
B	1618	4117	200																		
C	3224	5062	468																		
課題に対する予想の設定	2. 課題について予想する。	<p>◇予想してみよう。</p> <p>◇これまで中部地方で学習したことをもとに考えてみよう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Aが長野県ではないか。</li> <li>・ Bが新潟県ではないか。</li> <li>・ Cが静岡県ではないか。</li> </ul> <p>【予想】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 長野県は精密機械工業が発達していた。そのため、精密機械の出荷額が高いAかCが長野県ではないか。</li> <li>・ 新潟県は金属製品を製造する工場が集まっていた。そのため、金属の出荷額が高いBかCが新潟県ではないか。</li> <li>・ 静岡県は茶やみかんが栽培されていた。そのため、畑の面積が広いAかCが静岡県ではないか。</li> </ul>	<p>・ 新潟県、長野県、静岡県の位置を資料2で確認する。</p>	<p>☆課題について本時までで学習したことをもとに予想することができたか。【評価場面2：思考・判断・表現】</p>																
			<p>資料1で読み取った情報と既習知識をもとに3県がA、B、Cのどの県にあたるかを予想する。</p> <p>【言語力における「解釈」】</p>																		

	学習活動	○おもな発問 ◇おもなよびかけ	予想される 子どもの反応	指導上の留意	資料 (※) 評価 (☆)
検証のための資料の収集と選択・決定	3. 予想を検証するための資料の収集と選択・決定を行う。	○予想を立てることはできたかな。  ○ほかにどのような資料があればいいですか。	・ A、B、C それぞれに二つまで候補をしぼることはできた。しかし、これだけの資料では正解を導き出せない。  ┌-----┐ └-----┘ 【資料の収集と選択・決定】 ・ A、B、C の雨温図があれば、気温や降水量から北陸、中央高地、東海のどこに位置するかがわかる。 ・ 輸送機械工業の出荷額があれば、オートバイや自動車の工場が多い静岡県がわかる。 ・ 果実の生産額があれば、果樹栽培がさかんな長野県がわかる。 ・ 米の生産額があれば、稲作がさかんな新潟県がわかる。		☆予想を検証するための資料を本時までで学習したことをもとに選択・決定を行うことができたか。 <b>【評価場面3：思考・判断・表現】</b>
	 <div style="border: 2px solid pink; padding: 10px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> <p>予想を検証するための資料を既習知識をもとに 選択・決定を行う。 【言語力における「解釈」】</p> </div>				
選択した資料をもとにした検証	4. 選択した資料をもとにした検証を行う。	◇選んだ資料をもとに、自分の予想が正しいかどうか調べてみよう。	・ Aは果実の生産額が高い。Aは長野県である。  ・ Bは米の生産額が高い。Bは新潟県である。  ・ Cは輸送機械工業の出荷額が高い。Cは静岡県である。		

	学習活動	○おもな発問 ◇おもなよびかけ	予想される 子どもの反応	指導上の留意	資料(※) 評価(☆)
まとめ	5. 中部地方 の特徴をま とめる。	◇中部地方の 特徴をまと めよう。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <b>【单元をとおして習得する知識】</b>            その土地の自然の条件や社会の条件            を生かして各地の産業は発達してい            る。         </div> <div style="border: 2px solid pink; padding: 10px; text-align: center;">  <p>中部地方の特徴を原因と結果の関係で説明する。 【言語力における「説明」】</p> </div>		☆中部地方の 特徴をまと めることが できたか。 <b>【評価場面            4：知識・            理解】</b>

## 6 評価について

モデル授業にもとづいて、社会科における「言語力」の具体的な評価方法について述べていく。今回は、授業においてワークシートを使用していること想定し、ワークシートにもとづいて評価する方法を示す。

### (1) 【評価場面1：技能】

「技能」とは、「資料活用の技能」である。資料から情報を正確に読み取ることができるかを評価することになる。社会科における「言語力」の「読み取り」のレベルの評価である。

モデル授業においては、課題の把握の段階になる。資料1から、正確な情報を読み取ることができたかを評価するのである。

例えば、「Aの県は、畑の面積が一番広い。」や「Cの県は、精密機械も金属の出荷額も三県の中で一番多い。」「Bの県は、畑の面積が三県の中で最も狭くて、精密機械の出荷額も一番少ない。しかし、金属だけは多いな。」などという情報を読み取ることが求められる

のである。「技能」は、情報を正確に読み取った内容がワークシートに書かれているかどうかで評価することになる。評価の規準は、「なぜ疑問」への予想をしたり、仮説を立てたりするための特徴が読み取れているかということになる。

### (2) 【評価場面2：思考・判断・表現】

「思考・判断・表現」は、一体で評価しようということを教育現場でよく聞く。しかし、本来性格の違うものを一体で評価することはできない。【評価場面2】では、「思考」を評価することになる。【評価場面1】で読み取った情報と、それまでに習得している知識を組み合わせることで予想・仮説を設定する場面である。社会科における「言語力」の「解釈」のレベルの評価である。

モデル授業では、資料1から読み取った情報に、それまでに習得している知識を組み合わせることで「解釈」していく過程を示している。「Aの県は、精密機械の出荷額が高い。Cの県も高い。精密機械工業が発達していたのは、長

野県だったな。AかCが長野県かな。」などと予想していくことになる。その際に、資料から読み取った情報と、習得している知識を組み合わせて考えることができているかで「思考」を評価することになる。

### (3) 【評価場面3：思考・判断・表現】

【評価場面3】でも、「思考」を評価することになる。【評価場面2】で設定した予想・仮説を確かめるために「資料の収集と選択・決定」を行う場面である。社会科における言語力の「解釈」のレベルの評価である。

モデル授業では、設定した予想・仮説を確かめるための資料を収集・選択する。資料を選択するために活用されるのが、それまでに習得している「知識」である。

「A・B・Cそれぞれの雨温図があればわかる。気温や降水量から、北陸、中央高地、東海の区別ができる。」や「A・B・Cそれぞれの輸送機械工業の出荷額がわかれば、静岡県がわかる。」など、予想・仮説を確かめるために必要な資料を選択できているかで「思考」を評価することになる。

### (4) 【評価場面4：知識・理解】

【評価場面4】では、「知識・理解」を評価する。探究した結果として、新たな知識を習得することになる。新たな知識が、社会のしくみを原因と結果の関係で説明できているのかを評価することになる。社会科における言語力の「説明」のレベルの評価である。

モデル授業では、第一時から本時を通じて、中部地方の特徴を「自然の条件」や「社会の条件」を生かして、「各地の産業が発達」していることを説明できているかで「理解」を評価することになる。授業の最後に、ワーク

シートにわかったことを記述させることによって評価することができる。

## 7 おわりに

本稿では、教育現場であいまいな言葉となっている「言語活動の充実」や「言語力」について考えてきた。

教育活動は、子どもを賢くするためものである。そのためには、その内容が評価できることが大切である。その手立てとして「言語力」を構造化し、授業過程の場面にあてはめて考えるとわかりやすいことを提案した。教育現場の日々の社会科の授業実践の参考となれば幸いである。

本稿の執筆にあたり、兵庫教育大学大学院の修士課程・専門職学位課程（教職大学院）の米田ゼミの院生には多大な協力をいただいた。とりわけ、授業モデルの作成においては、筆者の理論にもとづき、評価の課題が多い「思考」の評価場面を具体的に組み込んでくれた。心から感謝申し上げます。

### 【参考文献】

米田豊編著 『「習得・活用・探究」の社会科授業&評価問題プラン』

明治図書2011.06

岩田一彦・米田豊編著 『「言語力」をつける社会科授業モデル小学校編』

明治図書2008.03

岩田一彦・米田豊編著 『「言語力」をつける社会科授業モデル中学校編』

明治図書2009.09

岩田一彦・米田豊編著 『中学校社会科「新教材」授業設計プラン』

明治図書2009.04

## ワークシート例（記述している内容は、生徒が記述することを期待する内容）

	資料から読み取ったこと	それまでにわかっていること	予想	確かめに必要な資料
A	○畑の面積が一番広い。	□静岡県は茶やみかんの栽培がさかん。	静岡	＊「雨温図」 ＊「輸送機械工業の出荷額」 ＊「果実の生産額」 ＊「米の生産額」
	○精密機械の出荷額が多い。	□長野県は、精密機械工業がさかん。	長野	
B	○畑の面積が一番狭い。			
	○金属の出荷額は多い。	□新潟県は金属製品を製造する工場が多い。	新潟	
	○精密機械の出荷額が一番少ない。			
C	○精密機械の出荷額が一番多い。	□長野県は、精密機械工業がさかん。	長野	
	○金属の出荷額が一番多い。	□新潟県は金属製品を製造する工場が多い。	新潟	
	○畑の面積が広い。	□静岡県は茶やみかんの栽培がさかん。	静岡	

わかったことを書きましょう。

中部地方では、それぞれの地域の自然の条件や社会の条件を生かして特色ある産業が発達している。

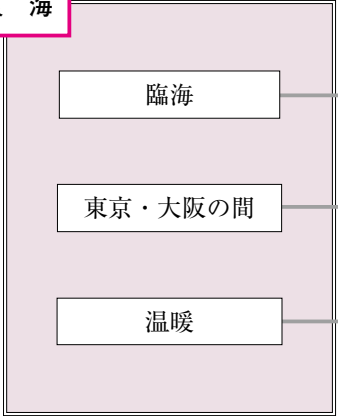


(1) 単元構造図

第一時  
(習得する知識)



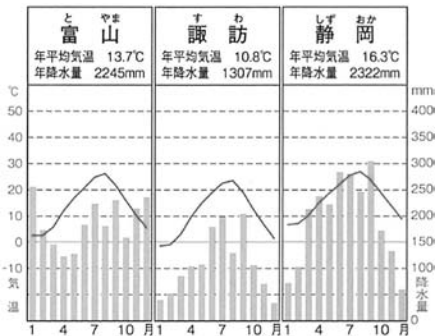
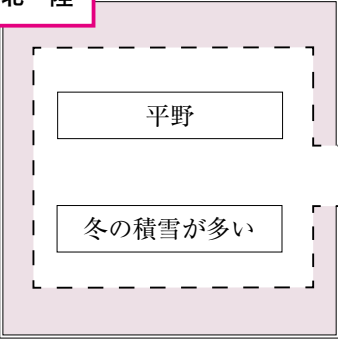
東海



中央高地



北陸



第二時 (習得する知識)

鉄鋼業・石油化学 + 織物機械の製造技術 → 輸送機械工業の発達

第三時 (習得する知識)

施設園芸 + 交通の便のよさ → 野菜や果樹、花の栽培がさかん

第四時 (習得する知識)

水はけがいい + 果樹栽培がさかん → 豊富な水 → 電気・精密機械工業が発達

年	総面積 (ha)	果樹 (%)	野菜 (%)	森林 (%)	その他 (%)
1950年	79976ha	22.7%	1.7%	10.9%	57.9%
1980年	41300ha	20.8%	14.8%	30.5%	20.4%
2008年	22300ha	23.8%	15.6%	48.4%	12.2%

第五時 (習得する知識)

稲作がさかん → 地場産業が発達

県	水田率 (%)
全国	54.3
富山	96.0
福井	92.1
滋賀	91.6
石川	90.7
新潟	88.5
山梨	86.9
長野	83.6

	精密機械の出荷額 (億円) (2007年)	金属の出荷額 (億円) (2010年)	畑の面積 (百ha) (2011年)
A	2970	2601	557
B	1618	4117	200
C	3224	5062	468

中部地方では、それぞれの地域の自然の条件や社会の条件を生かして特色ある産業が発達している。

第六時 (習得する知識)